

北海道の希少動物と自然環境を守る。

ほっくー基金

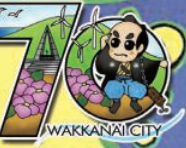


北洋銀行では、社会貢献活動の一環として、北海道内の希少動物や自然環境を守る「ほっくー基金」を設立しました。
「ほっくー定期預金」にお預け入れいただく、その預金額に応じた金額(満期前不発行による郵送料金分を含む)を当行が基金として拠出します。



第51回

全国ホテル研究会



祝 稚内豊富大会



期日 2018年 7月20日(金) - 22日(日)
平成30年
場所 稚内総合文化センター

主催：全国ホテル研究会
主管：第51回全国ホテル研究会北海道稚内・豊富大会実行委員会
【構成団体及び機関】
稚内市 豊富町 ホテルの住む故郷を造る会
稚内市教育委員会 豊富町教育委員会
共催：稚内市教育委員会
後援：環境省 北海道 稚内市議会 豊富町議会 稚内商工会議所 稚内観光協会
稚内市校長会 稚内市公立学校教頭会 豊富町校長会 豊富町公立学校教頭会
稚内観光物産協会 稚内料理飲食店組合 稚内農業協同組合 稚内ホテル旅館業組合
読売新聞北海道支社 毎日新聞北海道支社 北海道新聞稚内支局
宗谷新聞社 稚内プレス社 エフエムわっかない

今なら
金利上乘せ
なし!

北洋銀行の住宅ローン団信に、 11疾病団信が登場しました。



11 疾病
保障

生活習慣病団信〈入院プラスα〉のご案内

死亡・高度障害状態、医師の診断書等で保険会社に
余命6ヵ月以内と判断されたときの保障に加え

がん

(所定の悪性新生物)と
診断確定された場合

プラス

10

種類の生活習慣病

で入院が継続して180日以上となった場合

- 糖尿病 ●高血圧性疾患 ●腎疾患 ●肝疾患 ●慢性膵炎
- 脳血管疾患 ●心疾患 ●大動脈瘤および解離 ●上皮内新生物
- 皮膚の悪性黒色腫以外の皮膚がん

住宅ローン残高が **0円**

【引受保険会社】
クレディ・アグリコル
生命保険株式会社

さらに
安心

病気やけがで入院が連続して **5日** 以上となった場合 **10万円**※

病気やけがで入院が連続して **31日** 以上となった場合 **月々の住宅ローンの返済額を保障**※

がん (所定の悪性新生物)と診断確定されたら **100万円**※

上皮内がん・皮膚がん と診断確定されたら **50万円**※

プラス **ローン借入者の配偶者ががん** (所定の悪性新生物)と診断確定されたら **100万円**※

※給付金のお支払いにはそれぞれ支払回数に上限があります。詳しくは、「被保険者のしおり」をご確認ください。

◎ご利用いただける方:新規に住宅ローンをお借入される方で、お借入時の年齢が満20歳以上満51歳未満、かつ完済時満82歳未満の方
◎住宅ローン残高が0円になるには、別途条件がございます。詳しくは北洋銀行窓口へお問い合わせください。

お問い合わせは「本店ローンプラザ」専用フリーダイヤル

0120-808-389 [受付時間] 平日9:00~16:30
土・日・祝10:00~16:30 (年末年始は除きます)

北洋銀行
www.hokuyobank.co.jp

はるかな想い

過去のはるかな想いと
これからはるかな想いと
命つむいで細々と生きてきた蛍への想い
はるかな想いと直ぐ側に
飛んでいた頃のなつかしさ
はるかな想いといたころの小川
めだかもやごもたにしも消えた
これからのわたしの想い
はるかな想いと光と逢いたい願い
はるかな想いと居る世界
母と眺めたほうたるを
母恋うたびに想いだす
呼びもどそうよ声かけて
はるかな想いと居る世界
めだかもやごも居る小川
はるかな厚きころもて
呼び戻そうよお互いに
こころいやしてくれそうな
ちいさくやさしき光持つ
蛍が群れて飛ぶ日まで
めだかもやごも居る小川

ホタルの住む故郷を造る会
会員 白戸 尚

この開催要項の表紙・ポスター・チラシ・のぼり旗・バッジのデザインは、
関屋 敏隆 (絵本作家) さんのご協力をいただきました。

○関屋 敏隆 (絵本作家) 1944年生まれ

主な絵本 「はくらは知床探検隊」 岩崎書店

「まぼろしのデレン ～間宮林蔵の北方探検～」 福音館

「北加伊道 ～松浦武四郎のエゾ地探検～」 ポプラ社

第51回全国ホタル研究大会 北海道稚内・豊富大会に寄せて



全国ホタル研究会
会長 遊磨 正秀

この度、第51回全国ホタル研究大会が、ここ北海道稚内において全国の会員ならびに地域のみなさまの参加により開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

昭和43年（1968年）に始まりましたこの全国ホタル研究会は半世紀の歴史を超え、新たな歴史を刻み始めることとなります。その間、さまざまな環境破壊・汚染問題が社会的に問題視され、環境庁が環境省に格上げされて環境関連の監視が強化されました。さらに、少なからぬ生き物が絶滅の危機に瀕していることが重視されるようになり、生物多様性条約の締結が国際的に進みました。それに呼応するように日本においても、環境・河川・農業・林業・漁業関連などの法規において環境保全あるいは生物多様性保全に配慮することが義務付けられました。それは、それまでの経済の発展を重視した社会の動きに対する反省ともとらえることができるものです。

本会がとりあげていますホタル類は、その光の美しさから昔より多くの人々に親しまれてきました。しかし、各地においてホタルが減少したことから、その回復を目指し、またそれらの生息環境の改善を試みるといった、さまざまな保全活動が粘り強く行われてきました。そして近年は環境改善が進み、さらに多大な保全・保護の対策が功を奏して、河川や水路では水生のホタル類が、また林野では陸生のホタル類がその命脈を復活させてきたところも増えてきました。

北海道には釧路湿原やサロベツ湿原など、豊かな自然が残されています。それら、日本においては極寒の地にも、可憐なヘイケボタルの舞いを見ることができます。しかしながら、それらの地においても河川整備や耕地開発などの影響を受けて、本来の環境が失われつつあるという話も聞きます。暮らしをより経済的に、そして快適、安全なものにしようとする社会の変革の末、実は私たちの暮らしの中での心のうるおいやすらぎをもたらしてくれる自然の恵みの重要性にあらためて気づかされることになってきています。

私たちの暮らしの身近な場所のいたるところでホタルたちが飛び回り、さらに四季のさまざまな生き物たちが賑わい、それらの情景によって、より豊かな心身を育むことができるような環境を増やしたいものです。本大会が、多くの方々の今後の活動に有益な場となることを願っています。

第51回全国ホタル研究会 北海道稚内・豊富大会開催に当たり



稚内ホタルの住む故郷を造る会
全国ホタル研究会 北海道稚内・豊富大会実行委員長
阿部 勇

本大会を開催するに当たり、ひとことご挨拶申し上げます。

ここ最北の町・日本のてっぺんにて、第51回全国ホタル研究会北海道稚内・豊富大会が盛大に開催されるにあたりまして、全国各地からお出でいただいた皆様を心から歓迎申し上げます。

ここ稚内におきましても、55年前ぐらいまではホタルもたくさん光っておりました。当時は畑作、特にジャガイモ農家が多く存在していました。昭和35年ごろから酪農が始まり、牧草地に造成のため畑が改良され、残念ながら川が汚れホタルもいなくなりました。

「ホタルの、あの光を子供に見せてあげたい」と、30年前頃からホタルに取り組んだ人が（故）平沼道弘君でした。

彼が北海道大会・全国大会と参加をして、全国では北海道からただ一人の理事でした。北海道大会は平成13年の第21回函館大会が最後のような感じです。私も彼といろんな会で一緒に活動していた中で、4年前からホタル育成してみませんか?と誘われました。西神楽から譲りうけた幼虫を平沼君から預かり私の工房で飼い始めました。時期が来たのでセットケースに移した後、見事にひかり始めました。平沼君が30年ほど幼虫を育てていたのに、光らせた事はなかったそうです。3月ごろ水槽が凍ってしまい、水層のガラスが割れたとか、いろいろ苦労したそうです。私も6年前ぐらいまで、樺太犬保存会で樺太犬を飼っていましたが、なかなか思うように行かなく、今では、樺太犬はもう日本にいません。残念です。

それから静岡県川根本町大会・鳥取県米子大会・新潟県関川村大会と参加しております。米子大会から全国大会を北海道でやってほしいと、平沼君とその仲間と受けることになりました。その大会を、誰よりも一番待ちに待ってた彼、平沼君が昨年4月に亡くなりました。ホタルの住む故郷を造る会の名付け親であります、平沼君の夢を皆で実現してあげようと、準備をしまいましたが、いたらない点も多々あるかと思いますが、お許し願います。

本大会を開催するに当たり、北海道、稚内市、豊富町、北洋銀行様はじめ協賛者の物心両面の絶大なるご支援をいただき開催できますこと、心から感謝申し上げます。

また、報道関係の力強いご支援をいただきありがとうございました。

終わりに、風の町稚内。空気が日本一美味しい、サハリンを望む自然豊かな最北を、楽しんでください。

参加者の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

ご挨拶



北海道知事 高橋 はるみ

第51回全国ホタル研究会稚内・豊富大会の開催を心からお慶び申し上げますとともに、全国各地からご来道いただきました皆様を、心から歓迎いたします。

北海道は、四方を海に囲まれ、雄大な山並みと、その山々を源とする大河川により平野が形作され、大地には森林が広がり、多くの湿原や湖沼が点在する自然豊かな地域です。

また、北方系の動植物とともに、本州以南の地域と共通する南方系の動植物も見られ、わが国でも特有の生態系が形成されています。

本大会が開催される宗谷地域は、北見山地が南北に連なり、東部はオホーツク海に面する平坦な臨海地、西部は広大なサロベツ原野を経て日本海に接し、南部は徳志別・幌別・頓別の各河川の流域が平野を形成して、オホーツク海に続いています。

こうした環境が、地域の基幹産業である漁業や酪農業を支えるとともに、その美しい景観は優れた観光資源にもなっています。

この豊かな自然を次の世代に引き継いでいくために、道では、ホタルの生息地となる河川においては、河畔に植生を施すことや自然に近い河岸づくりなど、動植物の多様性の高まる川づくりを進めています。また、農村部においては、水質保全を目的とする緩衝林の設置や排水路の設置など環境に配慮した農村空間の構築にも努めています。

稚内市や豊富町では、ホタルの住む故郷を造る会が、毎年、観察会や生息状況の把握など、ヘイケボタルの調査や生息環境の保全活動を行っています。

こうしたつながりから、今回、本道において、本大会が開催され、全国各地からホタルの研究や保護活動に取り組まれる方々が集い、研究発表や意見交換・情報交換が行われますことは、地域の特性に応じた多様な生態系や動植物の保全を目指す道としても大変意義のあることと考えており、このようなホタルの保護活動等を通じて、本道をはじめ全国において生物多様性に対する理解が一層深まることを期待しています。

また、今年には北海道命名150年の節目の年です。全国からお集まりの皆様には、この機会に是非、私どもが先人から受け継いできた豊かな自然や食など、本道の魅力をお楽しみいただければ幸いです。

結びに、本大会の開催にご尽力されました関係の方々には心から敬意を表しますとともに、全国ホタル研究会のますますのご発展を祈念し、ごあいさついたします。

ご 挨拶



稚内市長 工 藤 広

第51回全国ホテル研究会稚内・豊富大会が開催されますことをお慶び申し上げますとともに、皆様を心より歓迎いたします。

今年度は、本市の市制施行70年、さらには北海道と命名されてから150年、明治維新から150年と、我がまちはもとより、国や北海道にとっても、歴史上、大変意義深い節目の年でもあり、本市ではこの節目の年に、数多くの記念事業等を催し、市民ぐるみで、この70年を盛り上げるべく、鋭意、取り組んでいるところであります。そのような中、本研究大会が本市で開催されますことは、大変光栄でありますとともに、心より感謝申し上げます。

さて、稚内市は皆さんもご存じのとおり、日本の最北端に位置し、宗谷海峡を隔てたわずか43km先にはロシア・サハリン州を望む「国境のまち」であります。美しい北方景観が自慢の「利尻礼文サロベツ国立公園」を擁し、稚内港からは利尻・礼文両島へ定期フェリーが運航されているほか、羽田・新千歳空港とは空の便で結ばれ、多くの観光客の皆様にお越しいただいております。

主要な産業は「漁業」「酪農」「観光」で、広大な行政面積を持つ宗谷地方の中核都市であり、また、この豊かな自然環境を守り、次の世代へと引き継いでいくため、全国に先駆けて、再生可能エネルギーの導入に取り組んでいます。年間を通して強い風が吹く地域特性を活かした風力発電や、国内屈指の規模を誇る太陽光発電施設で作り出される電力は、市内で消費される電力量の約120%にも達しています。

本市は、将来の都市像を「人が行き交う環境都市わっかない」と掲げ、地域資源を最大限に活用し、賑わいがあふれ、人と地球にやさしいまちづくりを目指しています。

本研究大会が本市で開催され、全国からホテルの研究や保護活動に取り組む方々が一同に会し、ホテルに関する生態・増殖の研究、生息環境の調査保全などに関する情報交換や意見交換が行われることは、大変意義深いものであり、また、本研究大会を通じて、改めて本地域における自然環境の大切さへの理解が深まるものと期待しております。

結びに本研究大会の開催に尽力いただきました皆様に深く敬意を表しますとともに、大会の御成功と研究会のますますのご発展を祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

第51回全国ホテル研究会 稚内・豊富大会が本町を会場として 開催されますことを心より 歓迎いたします。



豊富町長 工藤 栄光

私たちのまち豊富町は、豊かな自然環境に恵まれた「最北の温泉郷豊富温泉と、どこまでも広がる湿原と酪農」のまちです。

豊富温泉は温泉水に石油分が含まれる世界にも希少な温泉として、昔からやけどや皮膚病に効能が高く「日本最北の温泉郷」と呼ばれており、近年は尋常性乾癬やアトピー性皮膚炎の療養湯治湯として全国から多くの湯治者をお迎えしています。

豊富温泉のもつ高い効能は皮膚疾患に悩む方々から「奇跡の湯」とも呼ばれ、油を含んだ泉質は世界には2つ、日本にはただ一つともいわれるほど希少な温泉です。保養に優れた温泉を医師である「温泉療養医」が推薦した温泉地100を選ぶものとして、全国に3,200あるといわれている温泉の中から名湯100選に「北海道豊富温泉」が認定されています。

「利尻礼文サロベツ国立公園」の一部である「サロベツ原野」。

どこまでも広がる原野には、エゾカンゾウなど約70種類もの花々が咲き、野鳥や動物たちが豊かな命を育んでいます。サロベツ原野は低地における高層湿原として日本最大の広さを持ち、オオヒシクイなど渡り鳥の中継地、タンチョウの営巣地として2005年にラムサール条約の登録湿地として指定されています。

豊富町は牛が約1万5千頭飼養されている酪農が基幹産業のまちです。

北海道の中でも最北に位置する豊富町の冷涼な気候と広大な牧草地の中で、乳牛たちがストレスなくのびのびと過ごしています。地元の酪農家が搾った新鮮な生乳から自然の風味豊かな「北海道豊富（サロベツ）牛乳」が製造されています。

さて、本町でのホテルは、その昔、多くの場所で生息していたと考えられますが、貴重な財産として認識された歴史はまだ浅く、現在は少数ではございますが、全国からご参加いただいた、ホテル研究や保護活動に取り組まれております諸先輩方からの貴重なご意見をいただきながら、この小さな灯りを育てて参りたいと思います。

結びに、本大会の開催にご尽力いただきました皆様に深く敬意を表しますとともに、大会の御成功と、研究会の益々の御発展を祈念いたしまして、あいさつとさせていただきます。

遺志を受け継いで



平沼 道弘

平沼道弘さんは、稚内ホタルの住む故郷を造る会（稚内ホタルの会）の前会長です。平成29年4月16日に、突然逝去されました。享年65歳でした。

平沼さんは、「ホタルを通して、美しい自然を守り、子どもたちに伝えたい。」という思いから、数十年前から、ホタルを守り、身の回りの自然環境を考え、自然保護に尽力してきました。

その思いから、仲間と一緒に稚内ホタルの住む故郷を造る会（稚内ホタルの会）を立ち上げ、地道に活動を続けてきました。その思いは稚内市に止まることなく、北海道にも活動の場を広げ、もちろん、全国ホタル研究会にも積極的に参加をしてきました。また、北海道の理事として長く役割を發揮してきました。

その活動や思いから、平成30年には北海道稚内市および豊富町において、第51回全国ホタル研究会の開催と動きがあり、その準備を進めてきました。ところが、昨年突然逝去され、稚内の仲間には「大会を返上しよう。」との声もありましたが、多くの仲間たちからは「平沼さんの思いを受け継いで、稚内で大会を成功させよう。」ということで、今大会の開催の決定を見たところです。昨年度の新潟県関川村大会には、残念ながら平沼さんは遺影の参加となりました。

平沼さんが常に言っていたことは、「日本人は、昔から四季折々の自然を好み生活のなかに上手に取り込み、思い思いに楽しんできました。どんな日本人も自然を守り美しい姿のまま子どもたちに手渡すために、何ができるのだろうと考えてきました。生き物は、5年10年といった単位で見ていく必要があります。そして、ホタルの場合も、水の大切さが真っ先に言われます。それだけでなく、環境全体として考えなければなりません。」

このような平沼さんの思いを受け継いで、地元の関係者は今大会の成功に向けて準備を進め、本日、開催の運びとなりました。ご協力頂いた皆様に感謝し、ひきつづき、彼の遺志を紡いでいこうと決意しています。

プログラム

1日目【 7月20日(金) 】

時 間	内 容	会 場
15:00～16:00	参加者受付	稚内総合文化センター ロビー
16:00～16:15	オリエンテーション	稚内総合文化センター 大ホール
16:30～17:20	豊富町へ移動	
17:30～	豊富会場 開会式 (1) 開会・歓迎の挨拶 (2) 歓迎アトラクション	豊富中学校 体育館
18:00～18:20	研究発表 < 1 > ① 塩 立志	
18:30～19:20	夕食	豊富中学校 体育館他
19:30～19:40	観賞会会場へ移動	
19:45～20:30	ホテル観賞会	豊富町自然公園
20:40～21:30	稚内市内へ移動	

2日目【 7月21日(土) 】

時 間	内 容	会 場
9:00～9:30	参加者受付 (2日目から参加者のみ)	稚内総合文化センター ロビー
9:30～10:10	開会式	
10:20～11:30	研究発表 < 2 > ② 渡部 恒久 ③ 川原 修子 ④ 高橋 慎	稚内総合文化センター 大ホール
11:40～12:30	研究協議 (パネルディスカッション)	
12:30～	昼食 (全国ホテル研究会 役員会)	稚内総合文化センター 小ホール 他 (稚内総合文化センター 会議室 B)
13:00～13:30	歓迎アトラクション (1) 合唱 (エンジェルボイス) (2) 南中ソーラン (稚内南中学校)	稚内総合文化センター 小ホール
13:40～15:15	研究発表 < 3 > ⑤ 並河 聰 / 加村 賀勇 ⑥ 井口 豊 ⑦ 高見 明宏 ⑧ 遊磨 正秀 ⑨ 大場 信義	稚内総合文化センター 大ホール
16:10～17:10	全国ホテル研究会 総会	
17:10～	移動	
18:00～20:30	交流・懇親会 (1) 開会・歓迎の挨拶 (2) 歓迎アトラクション ・フラウエンコール ・稚内海峡太鼓 (3) 懇親・交流 (4) 次大会への引き継ぎ	稚内サンホテル 銀嶺の間

3日目【 7月22日(日) 】

エクスカーション	(1) 市内観光 (2) 利尻・礼文観光	
----------	-------------------------	--

研究発表 < 1 >

- ① 「蛍を使った教育の可能性について」
豊富中学校教諭 塩 立志

研究発表 < 2 >

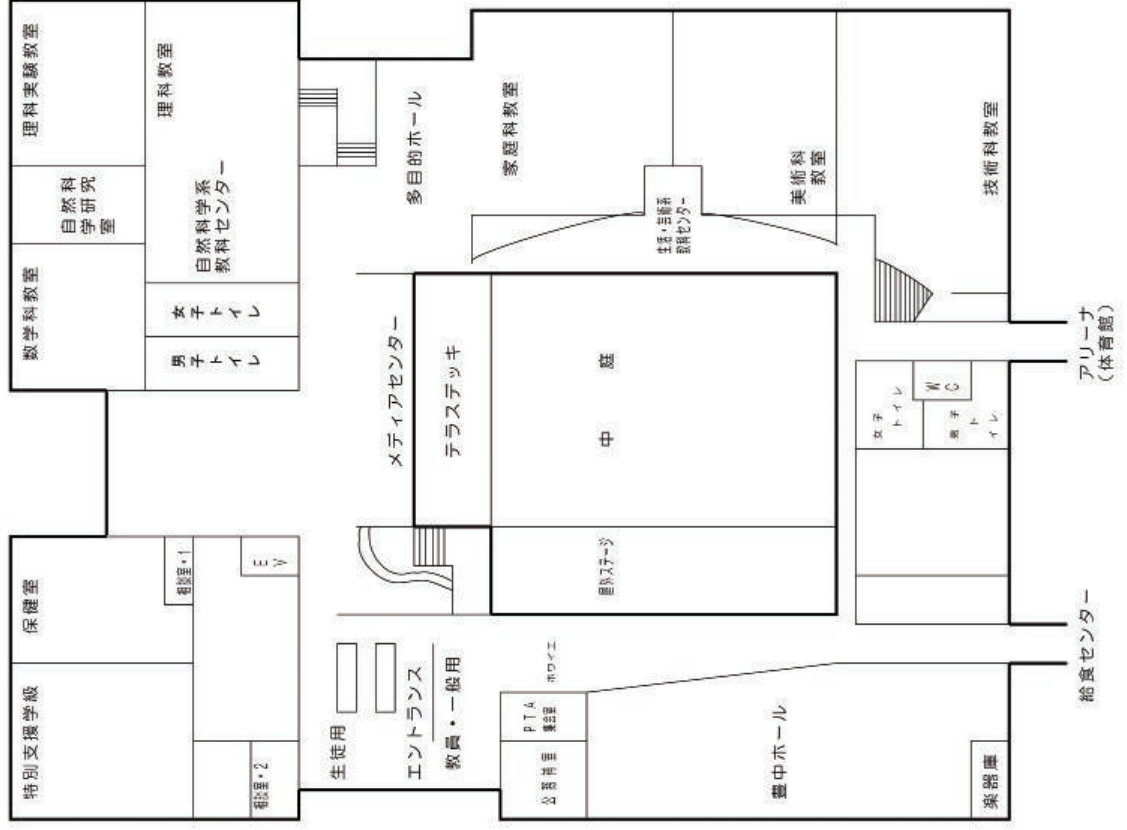
- ② 「クサナル緑の少年団の活動について」
クサナル緑の少年団指導者（稚内南小学校教諭）渡部 恒久
- ③ 「稚内市の自然環境を考える～子どもの学習活動を通して～」
富磯小学校校長 川原 修子
- ④ 「ハサンベツ里山づくりの20年計画」
栗山町ハサンベツ里山計画実行委員会 実行委員長 高橋 慎

研究発表 < 3 >

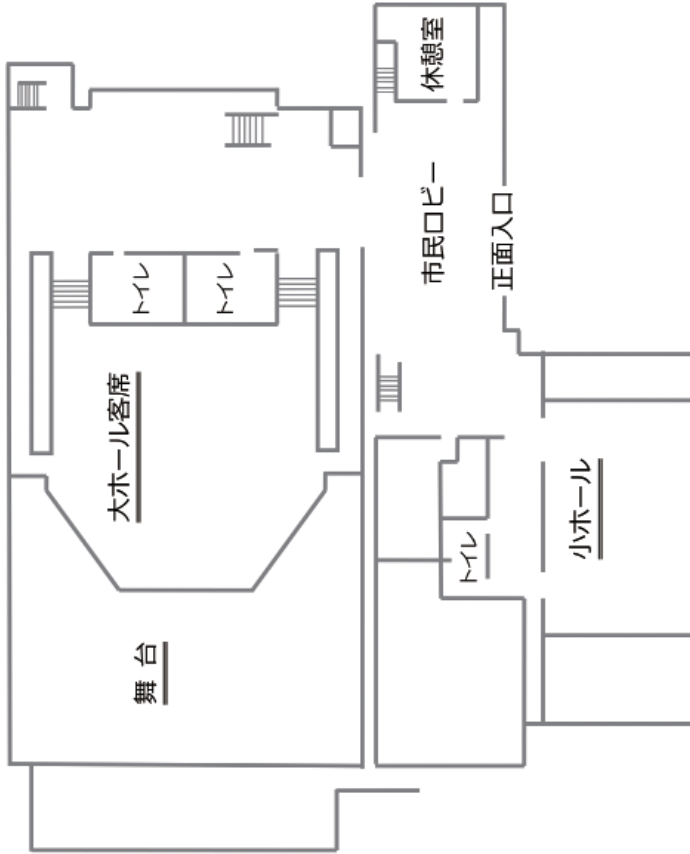
- ⑤ 「守山市ほたるの森資料館におけるゲンジボタルの飼育状況」
並河 聡 / 加村 賀勇
- ⑥ 「ホタルの文化昆虫学研究史」
井口 豊
- ⑦ 「ヘイケボタルとゲンジボタルの核型分析の試み」
高見 明宏
- ⑧ 「ゲンジボタル成虫発光量の年変動:降雨以外に月の明るさは影響するのか」
遊磨 正秀
- ⑨ 「ヘイケボタルとその近縁種の多様性」
大場 信義

会場案内

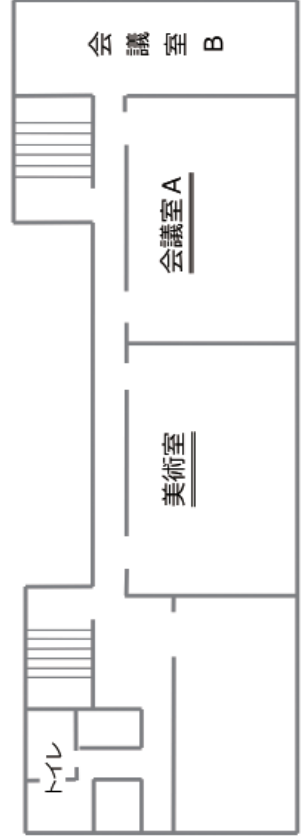
豊富中学校 1階平面図



稚内文化センター 1階平面図



稚内文化センター 2階平面図



蛍を使った教育の可能性について



はじめに

現在、中学校の教育では「総合的な学習の時間」が設けられ、自分たちの住む地域について学習する機会が与えられている。そこでは、地域の特徴、自然環境、産業、歴史などを学び、さらに交流まで、幅広い活動が求められている。そこで、地域の自然を特徴づける要素である「蛍の生息」を通して、自分たちの住む地域について詳しく学ぶきっかけにすることが出来ないか、その可能性を探るために教育活動として蛍の飼育や調査を行った。

豊富町の特徴について

豊富町は日本最北である稚内市に隣接する町である。国立公園であるサロベツ湿原を有し、貴重な自然環境が身近にある。また、産業としては酪農が盛んで、さらに全国的にも珍しい泉質をもつ豊富温泉がある。温泉の主成分でもある原油が産出し、戦時中は石炭や泥炭も盛んに採掘されていた。市街地を流れるシモエバコロベツ川には、サケ、サクラマス、イトウなどが生息し、資源も自然も豊かなところから豊富という町の名前がつけられたと言われている。現在、市街地は整備され、他の地域の町と同じように見えるが、元々は泥炭地の湿原の環境であり、排水工事を行うことによって土地を乾燥化させ住宅を建設出来るようになってきた。このため、豊富町の市街地周辺には湿地帯が多く、様々な動植物が生息する環境が残されている。



豊富町の子どもたちと地域の自然について

このような貴重な自然環境を持つ豊富町だが、子ども達の多くは自分たちの住む地域の貴重な自然環境をほとんど知らない。このため、豊富中学校ではもっと子ども達に地域の特徴を知ってもらうため、総合的な学習の時間を使って、「地域環境体験学習」を行っている。これは1年次に地域の最大の自然環境であるサロベツ湿原について学ぶため「サロベツ湿原センター」を訪れ、様々な事を学び発表するという取り組みである。

しかし、ここでは地域の大きな自然環境について学ぶことは出来ても、もっと身近な、町の建設とともに移り変わってきた小さな自然については、あまり学ぶことが出来ない。そこで、この地域の身近な自然に生息する蛍を調べること、自分たちの周辺の自然環境や町の建設の歴史を学び、地域との交流の機会を持つことにつながるのではないかと考え、蛍の持つ教育の可能性に気づくことになった。



豊富町の蛍と子ども達

「豊富には蛍がいるんだよ」と子ども達に話すと、ほとんどが「うそー!」「見たことない!」「いない!」と答える。私自身豊富町に住むようになって7年になるが、噂は聞いても実際に見たことが無かった。今回、稚内蛍の会の阿部さんとサロベツ湿原センター嶋崎さんの協力により、実際に蛍の生息地を訪れ、その生息数の調査に同行することが出来た。小さな生息地ではあるが蛍はいた。数十年前は見渡す限り蛍が乱舞していたという。しかも、1年の半分は冷たい氷と雪に閉ざされたこの最北の地に。開発がすすみ、環境が激変する中で残された小さな自然に蛍は生息していた。しかし、その蛍が放つ淡い光は感動的で、あの小さな虫がなぜこんなにきれいな光を出すのかという疑問がわき起こってくる。これを子ども達に見せ、同じ感動を分かち合いたいという気持ちも同時にわき上がってきた。

子ども達に蛍についての基本的な事を質問してみると、ほとんど知らなかった。まして、どんな幼虫でどんなところに住み、どんなものを食べているかになると想像もつかない様子だった。ただ飛んで光る小さな虫という認識であった。このため、自分たちの地域に生息する蛍が日本最北の蛍としてどんなに貴重なものかを伝えるとともに、蛍の生態を通してその生息環境である身近な水辺や湿地帯の重要性を伝えるため、蛍の飼育を学校で行うことにした。



学校での蛍の飼育

昨年度、稚内蛍の会の協力で3月末に蛍の幼虫を100匹ほど頂き、飼育することになった。蛍の生態をなるべく多くの子ども達に知ってもらうために、私が所属する豊富中学校だけでなく同町の豊富小学校、兜沼小学校へも協力を依頼し、各学校で蛍を飼育することになった。水槽はなるべく多くの子ども達が見やすい場所に設置し、公開した。

蛍の幼虫を初めて見た子ども達は、その意外な姿に驚き、展示された蛍の成虫の写真と見比べて、「本当にこれが蛍になるの?」「蛍の幼虫って水の中にいるの?」「何を食べるの?」「これが本当に豊富にもいるの?」と質問の連続になった。子ども達の反応は強く、中学生達は「自分たちで生息地に行って捕まえてみたい」「蛍が実際に飛んでいるところを見てみたい」と言い、実際に生息地に行って蛍を見る生徒も現れた。

蛍の展示方法の失敗と子ども達への伝え方



上陸地設置が間に合わず水中で蛹化した個体



水中で蛹化した個体を上陸地においた（無事成虫になりました）

学校での蛍の飼育は、初めてということもありトラブルの連続であった。そして、展示方法や子ども達への伝え方を考える多くのきっかけを見つけることが出来た。その最大のものが、蛍は光るのがメイン（ヘイケボタルは幼虫もサナギも成虫も光る）なのに、光るところを見せることが出来ないことだった。夜になると生徒達は帰ってしまい、学校には一人もいなくなる。そのため、せっかく光っている蛍を生徒達に見せることが出来ない。単純な事だが、展示してから初めて気づいた。

飼育している教室で、夜にこっそり水槽をのぞくと光る幼虫。上陸地を設置するのが遅れ、水中で蛹化してしまった個体をそっと上陸地に乘せておくと、夜になってそれが突然光り始めたときの感動。さらに、ある晩、蛍水槽の近くで作業をしていた先生があわてて「先生、蛍が光ってるよ!」と職員室に駆け込み、教室の飼育箱をのぞき込むと、クリスマスツリーの電飾の様に連続で輝いていた場面。これらの感動の瞬間を味わえたのは一部の教師だけであった。しかし、一度だけ PTA の方々が会議で夜に学校を訪れたとき、光る蛍を見てもらうと、「すごく感動した!」「いつまでも見ていたい!」「ぜひこれを子ども達にも見せてほしい」という意見を頂くことが出来た。

そこで次年度は、「蛍について調べ、蛍について町の人と関わり、蛍の光るところを多くの人に見てもらう」という目標をたて、教育活動の一環としての蛍の飼育の可能性をさらに探ることになった。

教育活動としての蛍飼育の取り組みの開始

今年度、私は1年生の担当になり、担当する生徒の授業で蛍について調べることになった。まずはどのような活動にするかの方針をたてた。内容は・・・

- ①生徒自身が豊富町の蛍について調べる（地域の方々にも質問に伺う）。
- ②蛍を通して地域の歴史や自然環境などを知る。

- ③ 蛍を飼育しながら蛍の生態について学ぶ。
- ④ 蛍を多くの人に見てもらふ方法を考え、蛍が光るところを公開出来るようにする。

というものになった。実際にこれを行ってみると、豊富町の街の歴史や蛍の生態について、非常に多くのことを学ぶことが出来た。更に地域の方との交流をすることもできた。サロベツ湿原に惚れ込み、約60年前から豊富に移住してサロベツの自然を守る活動をしてきた村元さんにお話を伺うと、自分が初めて豊富の蛍を見たときの感動を話してくれた。それによると、豊富は市街地でも完全に湿地帯で、大きな建物を建てるには電柱並の大きさの杭を何本も埋め込んで基礎を作っていたこと、60年前はほとんど建物が無く、市街地でも蛍が乱舞していたこと、現在の生息地でも辺り一面、見渡す限りの蛍の乱舞が見られたことなどを知ることが出来た。さらに蛍の生息地については、日本海の砂浜近くの沼にも多くの蛍がいたこと、ある特定の貝が住む場所にしか蛍も生息していないことなども聞くことができた。これらはインターネットなどでは分からない地元の生きた情報だった。村元さんからは蛍の飼育方法や生態も教えていただき、実際に生息地まで同行して詳しく説明していただいた。そして最後に「蛍のことを調べてくれる子が出てきてくれてうれしい」「もっと地元の自然を知ってくれる子がふえてほしい」という意見を頂いた。



村元さんから蛍について教えていただきました



生息地にて直接御指導いただきました

蛍の新しい展示方法について

現在（6月中旬）はそろそろ蛍の蛹化が始まる時期になってきており、計画に従って蛍を公開する準備を始めなければならない時期でもあった。蛍が光るところを生徒達に見せたいというのが昨年からの目標だったが、生徒と話した結果、豊富中学校の生徒達だけでなく、保護者の方々や街の方々にも見てもらえるようにすべきだという結論になった。そのため、豊富中学校の構造の特徴を活かし、四角い校舎に囲まれた中庭のスペースに蛍用の小屋を設置し、多くの方々が気軽に蛍を鑑賞することが出来るようにすることとなった。計画がうまくいけば、地域の方々にも豊富に蛍が生息していることを知ってもらふ良い機会になる。蛍の鑑賞スペースに生徒が調べた説明パネルを設置すれば、豊富の貴重な自然をもっと知ってもらふことが出来る。そう考えて、現在はパネルの作成や蛍小屋の設計を行っている。蛍の羽化が成功した場合、全国大会の会場にもなる豊富中学校で会場に訪れた皆さんに、この蛍を鑑賞していただく事が出来ると思います。



最後に

今回の活動を通して、蛍には地域の自然や歴史を知るための大きな可能性があることが分かった。蛍の調査をするために訪ねた多くの方々が、蛍の話しながら自分が子どもだった頃の生活の様子や町の様子を話してくれた。これは蛍が生活に密着していたからであり、普通に町の歴史を聞くだけではなかなか聞き出せない生きた情報を掘り起こす力があることが分かった。また、蛍だけでなく他にも貴重な生物が住んでいる事も教えていただいた。現在では貴重なニホンザリガニが生息する場所や、幻の魚と言われるようになってしまったイトウが釣り堀状態で釣れた事など、地域の自然に関する新しい情報が得られた。さらに、蛍はその光る美しさで多くの人を引き寄せる。蛍を通して地域と学校をつなぐ事も大いに可能であるということが分かった。今後も今回の活動の結果をよく分析し、教育活動の一環としての蛍の飼育に取り組んでいきたい。

最後になりますが、この活動を支えてくださった稚内ホタルの会の皆さんをはじめ多くの方々に感謝いたします。本当にありがとうございました。



豊富町で確認したニホンザリガニ



豊富町で釣れたイトウ



ヒグマの足跡



日本海側の原生花園



7/21/2018

クサシル緑の少年団

ク・サン・ル(私・下る・坂)アイヌ語

クサシル緑の少年団が主に活動してきた「南小の森」を流れる川、ヤマメを放流してきた川「クサシル川」。そして清掃活動をしてきた、坂を下った利尻島を望む日本海岸（ルエラニ）、坂の下海水浴場。私たちのふるさとはです。



1.緑の少年団とは…

—

2.子育て平和都市宣言のまち稚内市に「南小の森」ができました

—

3.こんな活動してきました

—

4.いま願っています

—

稚内南小学校

0970004
北海道稚内市
緑1丁目11-8

TEL0162233329

FAX0162227924

1. 緑の少年団とは… (公益社団法人 国土緑化推進機構資料参考)

緑の少年団は、次代を担う子供たちが、緑と親しみ、緑を愛し、緑を守り育てる活動を通じて、ふるさとを愛し、そして人を愛する心豊かな人間に育っていくことを目的とした団体です。

(1) あゆみ

「グリーン・スカウト」の名称で、1960年代から緑化を実践する少年団の結成が呼びかけられ全国に広まりました。北海道では、1986年に、「北海道緑の少年団連絡協議会」が設立され、41団体1297名（H30/1/1現在）が登録されています。

(2) 緑の少年団の活動

◇森林づくり体験・学習活動

森林体験活動や、生き物調べ、巣箱設置などの環境学習活動のほか、木工・竹細工・クラフトなどの体験を行っています。



◇奉仕活動

街頭での緑の募金の呼びかけや、地域の花壇の手入れ・清掃など、積極的に奉仕活動を行っています。その他、全国植樹祭や全国育樹祭など緑化行事にも参加しています。

◇レクリエーション活動

ネイチャーゲームやツリークライミングなど、森林をフィールドとしたレクリエーション活動を行っています。また、野外キャンプや登山体験なども行っています。



2.子育て平和都市宣言のまち 稚内市 に 「南小の森」ができました

(1) 生徒指導上の課題から

昭和 50 年代後半、稚内市内の中学校では生徒指導上の課題を克服するために、地域・学校・保護者が共通の目線で語り合い子育てをすすめる取組がさかんに行われるようになってきました。

(2) 開校40周年を迎えた稚内南小学校では、

そのころ稚内南小学校父母と先生の会のみなさんは、次の 10 年間でどのような子育てを、どのような地域・PTA づくりをするか検討していました。

- ① 自然と親しみ、自然に対する関心と興味を喚起させる。
- ② 植樹をととして、働くことの苦労や喜びを味わう。
- ③ 労働の成果を将来にわたって確かめ、郷土への愛着心を深める。

これらを目的に、「南小の森造成 10 年計画」を立案し、稚内営林署、稚内市教育委員会など関係各所にはたらきかけました。そして川をザブザブ歩いて通り道にして木道をつくったり、熊笹を刈り取ったりと手作業で様々な観察や体験ができる遊歩道をはじめとする施設を造成し、昭和 61 年に「南小の森」をつくっていただきました。

(3) クサソル緑の少年団うまれる

「南小の森」を舞台にした自然体験活動は、ヤマメの放流、植樹、シイタケ栽培、巣箱設置など、自然との関わりの中で観察、遊びと体力づくり、勤労学習がすすめられました。そしてさらなるひろがりや学びにつなげるため、平成 5 年にクサソル緑の少年団が結成されました。



3. こんな活動をしてきました



ヤマメの放流を前に



ヤマメの放流



育った樹木の枝うち



ドングリの植樹

4. いま 願っています

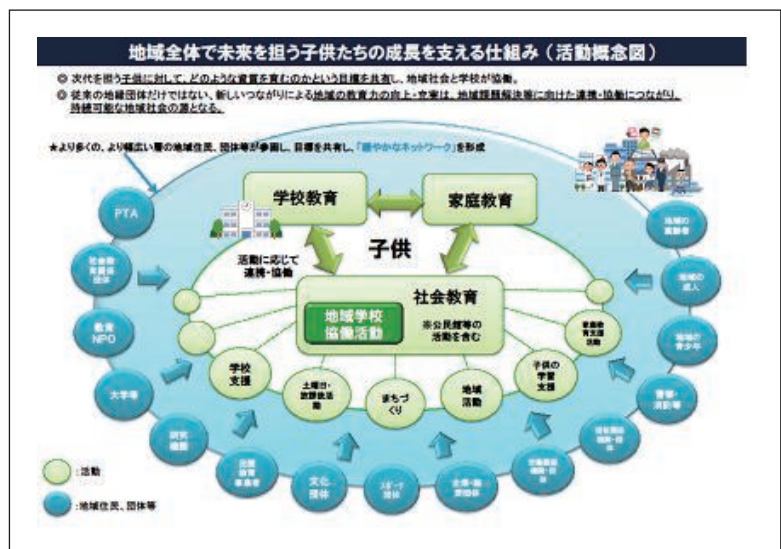
- ・周辺にヒグマが出たことがあります。せっかつくつっていただいた木道などの施設も四半世紀たち、さらに豪雨などの災害で危険な状態になってしまいました。そのために奥まで入れない「南小の森」入って活動がしたい。
- ・先輩たちが植えてくださった樹木が伸び、枝打ちができなくなってきたので、それにかわる森林に関する体験がしたい。
- ・一緒に計画を立てたり楽しんでくれる大人の助けがほしい。
- ・クササルの生態系に合ったホテルがとぶのを観てみたい。

【参考】

地域学校協働活動

(文部科学省資料より)

「地域学校協働活動」とは、地域の高齢者、成人、学生、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体・機関等の幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子供たちの学びや成長を支えるとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動です。



稚内市の自然環境を考える

～子どもの学習活動を通して



子育て運動40年 昭和61年6月7日 子育て平和都市宣言

●経緯

「二百海里規制問題」以降、稚内市の基幹産業である 漁業・水産業が不振となり地域経済が大きな打撃を受けた。大人たちの生活の不安定さが子どもたちに強く影響し、それが深刻な非行問題として現れたことに対し、1978年（昭和53年）から、市内ほぼすべての子育て・教育関係機関・団体が参加して子育て運動が始まった。さらに、1986年には大韓航空機撃墜事件を契機とし、「子育て平和都市宣言」が市議会の全会一致で採決された。「故郷の時代を担う子どもたちのすこやかな成長と平和なまちづくりを進めることは、全ての大人の責任である」と謳い、子どもたちのための平和な地域づくりが始まった。



●現在

現在の「子育て運動」の課題は、子どもの貧困問題、対象は児童・生徒から就学前及び青年期への対象の拡張へ、更に、主体は教職員から市民へと拡張している。

●具体的な活動

「宗谷教育講演会」・各地区での「講演会」の開催～感動的に子育てを学び合う みんなおいでよ!「親子ふれあいデー」 全市子育て運動交流研修会の実施、9月1日に実施する「子育て平和の日記念式典」年2回の子ども会議「平和折り鶴まつり」の開催・平和マラソン・平和駅伝中学生が医療探検講座に挑戦「貧困シンポジウム」でアクションプランの提言 等々



31回を数える富磯のサケの稚魚放流

現児童の父親たちが小学生の頃、昭和63年447匹の放流をスタートに、今年で31回を数えた富磯のサケ稚魚放流。サケ・マスは、北海道を代表する魚として広く国民に親しまれ、古くから『神の魚』として崇められ、伝統行事に使われる他、学校教育や社会教育の場において、自然環境の保全、命の大切さを教える教材として広く利用されてきた。



●当時のサケ事情

札幌市豊平川のカムバックサーモン運動(昭和53年1978年)の流れを受け、宗谷支場が設置され、その後、道立水産孵化場宗谷支場に継承された。それまで、増幌川は、湧き水のある産卵床が必要なサケにとって、水温が低すぎることもあり、生息していなかったが、温度調節や、浮遊物の濾過等新しい技術を導入し、遡上を可能にした。



●当時の様子(サケ稚魚放流を始めた当時の今井一郎校長先生にお話を伺って)

昭和63年増幌川川口水位観測員となった(昭和57年)釜沢一男さんが、小学生にもサケの生まれ育ちや、どうやってこの川に帰ってくるのかを伝えたいと、PTAと採卵・受精・ふ化を子ども達に見学・体験させたことが本校のサケ稚魚放流の始まりである。



●命の循環

<その1 私たちの祖先>

明治30年頃(現6年生伊藤さやかさんの)曾祖父である住職 伊藤徳水が、寺小屋教育を開設。その後、明治33年11月24日、宗谷南尋常小学校が開設されたことが、富磯小学校の前身である。鯿漁で栄えた富磯には、映画館もあり、お店も4件ほどあったそうだ。舗装されていない道を馬が荷物を運んでいた。のちに自転車も使われるようになる。

<その2 サケが森を育む>

海水中にある窒素15は、木の成長にとっても大事な栄養素である。川に遡上したサケがクマのえさになり、クマによって森に運ばれ、サケの死体が木に栄養をもたらすので、サケが多く遡上した翌年は木が育つと言われている。1頭のクマは700尾のサケを食べるといふ。クマによって森の奥深くまで運び込まれ食べ散らかされたサケは、森の生き物全体にとって貴重な栄養分となる。

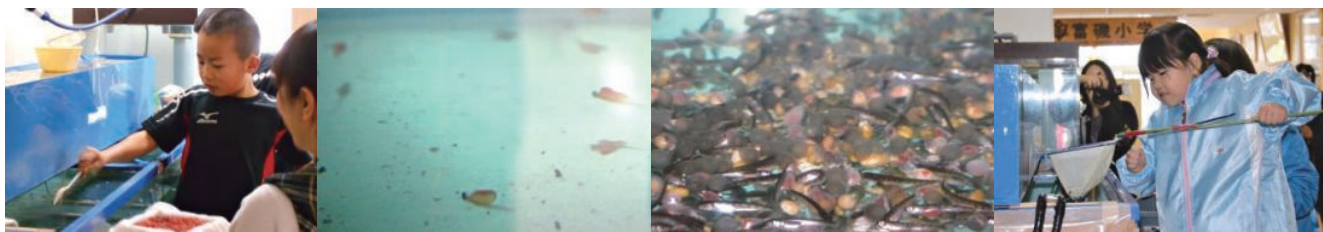
<その3 サケ料理の今昔>

さけを使った料理について地域の方から教えて頂いた。当時は、高級魚で食べ物というより、売り物で、食べたとしてもサケは塩サケ、卵は塩蔵のみのシンプルで質素であった。今は、バラエティに富んだ豪華なものに変化してきている。

●観察を通して

- 12月に発眼卵を譲り受ける(サケの卵を迎える会 3000粒)
- 一人一人スプーンで水槽にそっと入れる
- 静かな環境で、優しく見守る観察(観察日記)
- 黒い布で水槽を覆い、なるべく静かにしてあげる
- 2月から餌を与え、少しずつ大きくさせる(当番で記録)
- 当番で記録(積算温度480℃や稚魚の様子)
- 4月放流(2800尾 2~3cm 1g弱)
- その後の観察から分かったこと





今後、より一層大切にしたい富磯の自然・わたしたちのまち

保護者、地域や宗谷漁業協同組合の方々を中心に聞き取り調査を行い、富磯の歴史・先人のご苦勞を知り、感謝の思いと、この自然をより一層大切にしていきたいと思った。そのためには、自分たち一人ひとりの心がけはもちろん、仲間、地域と力を合わせる範囲を広げ、富磯のためにも地球全体を、地球のためにも富磯を大切にしたいと考えた。

●平成23年3月11日 環境都市宣言～人と地球にやさしいまちを目指して～

稚内市では、市民一人一人が、環境に対する意識を一層高めるため、自ら参加・行動することを宣言し、その決意を内外に明らかにするため「環境都市宣言」をしている。

●宗谷漁業協同組合では、

環境保全のために『植樹』や『川の水質検査』を行っている。木は、30年以上も植え続けているが、強い潮風にさらされ、かつ、鹿やネズミの被害もあり、なかなかうまくいかないとお話になっていた。

●先輩よりくぼくの将来の夢～久保田 勝喜さん>

ぼくの将来の夢は漁師になることです。さけの1m位のオスとメスを取って、その魚を富磯小学校にあげて育ててもらいます。

<十年後の自分へ～坂本 真一さん>

10年後の真一君お元気ですか。きっと漁師になっていると思います。富磯の自然を守って下さい。もっとよくして下さい。

●全校児童 10名の私たちにできることは、

まずは足元から「宗谷路クリーン作戦」や「ビーチコーミング」。収集するごみは、今回調べた70～80年前にはなかったビニールなどの自然にかえらないごみが増えたと聞く。ごみの分別、減量等、一人一人できることをしっかりしていこうと改めて考えさせられた。



ハサンベツ里山づくり20年計画

栗山町ハサンベツ里山計画実行委員会 実行委員長 高橋 慎

はじめに

北海道栗山町の市街地から約2km離れた「ハサンベツ地区」を、10年から20年という長い期間をかけて人と自然と農業が共生する『里山』として再生・創出した取組がある。北海道ではあまりなじみがない、この里山という言葉を使った取組の根底にあるのは、市街地と農業地域、都市と農村の接点の場づくりを、人と人との交流を通して創りあげていこうという栗山町民の思いである。町民が18年間かけて積み上げてきた里山づくりの活動内容について紹介したい（写真1）。

1. ハサンベツ里山づくり経過の経緯

(1) 住民参加による持続的な自然環境づくり

おだいしやま
御大師山の裏手にあたるハサンベツ地区は、夕張川に注いでいる小河川ハサンベツ川の流れて沿って続く、雑木林に囲まれた細長く開けた土地である。戦後は18世帯の農家が自家用の作物を作っていたが、昭和40年代の農業政策の転換（農地の大規模化）とともに離農が進み、しだいにハンノキやセイタカアワダチソウ、ヤナギ、ヨシなどが生い茂る荒地となり、ハサンベツ川は、河川改修事業によりコンクリートの三面張り用水路に変わり、水辺の生きものたちもいつしか姿を消した。さらに、粗大ごみの不法投棄により、「ごみ捨て場」の状態となっていた。

写真1 ハサンベツ里山



「この川をホタルの棲める川に復元しよう。トンボやドジョウが棲み、人と自然と農業が共生するふるさとの環境を取り戻そう」。ハサンベツ地区を再生し、ここに子どもたちが安心して遊べる川と森をつくりたいという住民側から『オオムラサキの舞うフェアブルの森からハサンベツへ』という報告書が出され、離農地の利活用をめぐる、行政と町民が一緒になって議論していった。

1999年、環境省（当時：環境庁）の補助を受けて、栗山町が約24haのハサンベツの離農跡地をふるさとの自然財産として購入した。町は「土地は買うが、口は出さない」というスタンスでのぞみ、使い道は自然環境を守る活動を繰り返し広げている町民グループに委ねた。伸び過ぎた草木の伐採やゴミの不法投棄の処理などを、行政と協力しながら、できるところから始めた。

日本では森をつくり利用しながら共に暮らしていくという思想や文化が育まれてきたが、北海道では、バブル経済を背景とした開発一辺倒の中で、「開発」か「保護」かが論じられていた。栗山の私たちが、この取組において着目したことは、戦後、このハサンベツ地区に18戸の農家が生活し、子どもを育て歴史をつないできたことである。その視点から、この地をそのままに放置するのではなく、あえて人手を加えて維持管理する里地里山としてその一部を田畑に復元することとし、北海道にはなじみの少ない「里山」という言葉を用いて活動を進めたのである。

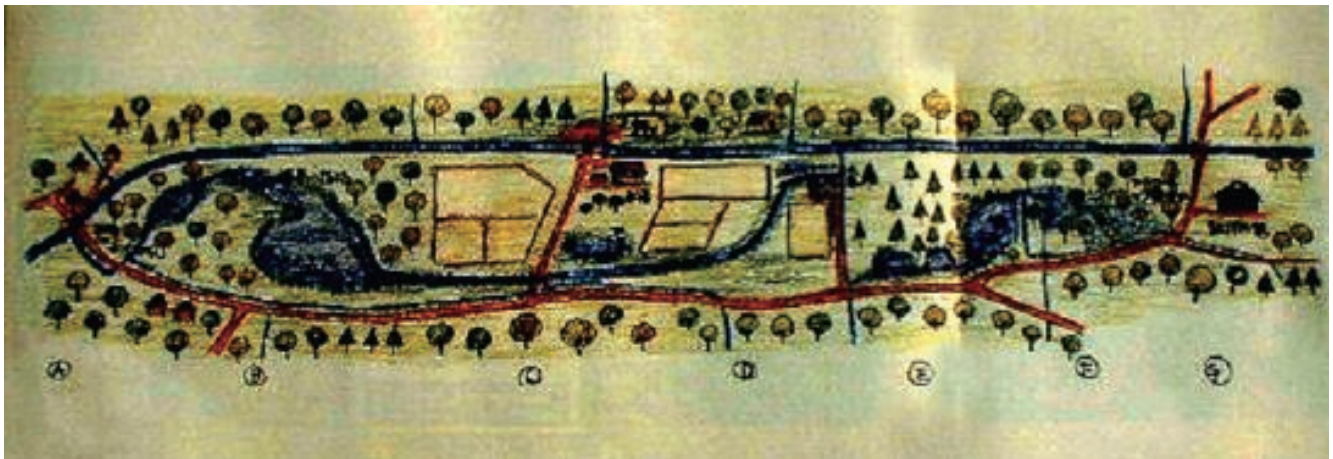
(2) ハサンベツ里山計画実行委員会の発足

2001年7月13日に、ハサンベツ地区の自然環境の復元を目的としたハサンベツ里山計画のもと、栗山町いきものの里づくり推進協議会の他、青年・女性団体や青少年育成会、さらには活動に賛同した町外者などにより、里山計画実行委員会（以下、「実行委員会」という）が立ち上がった。町には、基本的に金銭的支援を受けるのではなく土地を借り、河川法や都市計画法など法的問題の整理や町民間の調整などの役割を担ってもらう。計画や実行は町民で行う。そのために知恵・資材・労力を自分たちで生み出し、持ち寄って活動しようというものである。それをそのまま規約としてうたい、会員の条件とした。

2. 童謡の見える里山づくり

実行委員会により里山づくりの全体計画が練り上げられていく中で、計画は文章にしても分かりづらいということで、ハサンベツ里山づくりをイメージした図案を作成し、絵にすることでイメージを表現した（図1）。また、実行委員めいめいのプランを童謡のイメージになぞらえて「栗山町ハサンベツ里山20年計画」が作成され、「童謡が見える里山づくり」がスタートしたのである。

図1 絵で表現されたハサンベツ里山計画



(1) 「春の小川はサラサラ」プロジェクト

活動の中心に農林業体験の場づくりとともに、水辺環境を再生する「川づくり」を据えた。「川の環境が良くなると豊かな里山は生まれぬ」。まず取り組んだことは、魚類など水生動物の遡上を阻害しているハサンベツ川に設けられていた高さ1～2mの落差工を改修して魚が登れる「魚道」をつくり、子どもたちが遊べる「春の小川」を造成することであった。延長約2kmの「小川づくり」では、流域生態研究所の妹尾優二さんが関心をもち、設計と石組みの仕方などの技術指導を買って出てくれた。作業は実行委員会が手弁当で行い、本流から小川を引き、石を組んで淵や瀬も作った（写真2）。完成後、ウグイの群れやイバラトミヨ、スジエビやオニヤンマのヤゴなど、たくさんの生きものたちの生息が確認されてきている。

写真2 手弁当による小川づくり



さらに、2005年と2006年には、道州制モデル事業の道内6か所のモデル事業の一つに選ばれ、関連調査費を活用して、コンクリート三面張り排水路化していたハサンベツ川に一部自然河川を復元する「農村地域

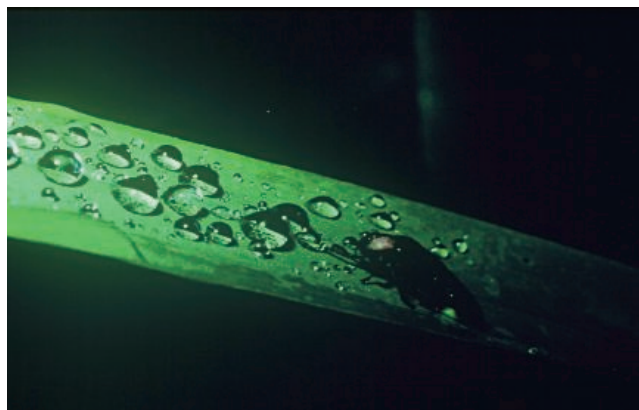
の小河川（用排水）の環境再生」を行った。実行委員会としては、メンバーにも負荷のかかる大変な取組だったが、北海道がこの取組を評価し予算化してくれた事業であり、最後までやり遂げたのである。この事業により、「ふるさとの川再生・創生」と題して、ハサンベツ川の切り替え水路や護岸改修、魚の生息場所の形成、植樹、土留め玉石組みダム設置が計画的に行われた。

このハサンベツ川の落差工への手作り魚道づくりの根底に、夕張川本流との魚類等の往来、石狩川・日本海とのひとつながりとしての川づくりを位置づけたことにより、たくさんの魚類や水生昆虫がよみがえってきた。こうした活動により、実行委員会は夕張川流域に対する河川協力団体に指定され、江別河川事務所の英断により、里山と石狩川、日本海の生きものの往来を遮断していた夕張川の栗沢頭首工（農業用利水施設）に2億5千万円もかけた魚道が設置されるという夢のような出来事が実現した。これに応じて、青年会議所や夕張川自然再生協議会の皆さんと共にふるさとの川の清掃を実施し、一昨年の秋には、73年振りに栗山町のふるさとの川でのサケ・サクラマス産卵を確認することができた。

(2) そのほかのプロジェクト

小川・池の造成やトンボの回復を目指して取り組んでいる「夕焼け小焼けの赤とんぼ」プロジェクトでは、一時消滅したナツアカネやシオカラトンボ、オニヤンマが戻ってきた。「ほーほーほたるこい」プロジェクトによるヘイケボタルの生息地づくりにおいては、他の生息地がどんどん無くなっていく中で、春の小川沿い一帯に光を放ち飛び交う、石狩低地帯でも有数の生息場所となった。「ミズバショウの花が咲いている」プロジェクトは、植物観察会のメンバーが中心になり取組を進め、種から育てて苗をつくり、水質浄化に適した植物や家畜糞尿などを浄化するための植物について実験を行い、一部湿原を復元させた。「菜の花畑に入日うすれ」プロジェクトでは、田んぼや畑を復元した。このように、会員で話し合い楽しみながらさまざまなプロジェクト活動を続けており、水田や水車、四季折々の花々、雑木林がつくり出す田園風景は、多様な生物の生息空間として、栗山町と近隣自治体の小中学校などの総合学習（環境学習・理科学習）の場として提供されている。

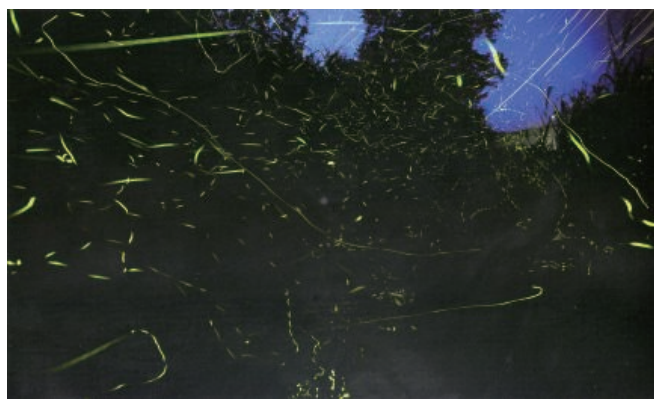
写真3 ホタルこいプロジェクトによる生息地づくり



(3) ハサンベツ里山に寄せる町民の思い

「人と自然の共生」をテーマとして里山づくりを進めていく上で、ハサンベツ里山に期待を寄せる町民からの厚志もこの活動の支えとなっている。2002年度に完成させた活動拠点施設「ハサンベツ里山ビジターセンター」の建設は、町民からの500円募金やボランティア活動によって行われた。子どもたちが体験学習で訪れたときの休息場や雨宿りをするところがないということから、町内で500円募金を呼びかけたところ、1か月半で予定していた額が集まった。

写真4 里山全体に光り飛び交う無数のヘイケボタル



また、活動を進めるうえで、雑木林の復元と活用にあたり、最も大きな懸案は、隣接する民有林の行方だった。この懸案に対してうれしい出来事が続いた。「未来の子どもさんたちのために大事に活用ください」という故

遠藤桃子さんの50haの山林の寄贈をきっかけに、4名の町民の皆さんから25haの寄贈林が加わり、町が購入した土地などとあわせて、フィールドは全体で135haに拡大した。

(4) ハサンベツ里山の日

里山づくりを広げていく取組では、5月から11月までの毎月第2日曜日を「ハサンベツ里山の日」とし、町民に呼びかけて作業の日としている。毎回テーマと予定の作業を町広報で町民に周知して、ハサンベツの自然再生を行っている。5月は里山開き、6月は野草復元のための苗畑づくり、7月は野草や水生植物の移植、8月は田畑の草取り、9月は農作物の収穫、10月は圃場片付け、11月は冬囲いなどの内容である。冬も、雪下ろしや炭焼きなどの活動を行い、通年でさまざまな活動を通して、地域一体となって豊かな里山づくりを進めている。

3. 18年の歳月を経過した、くりやまの里山づくりと今後

栗山町では、1985年の国蝶オオムラサキの生息確認以降、さまざまな自然教育や環境教育とそのベースづくりに取り組んできた。ハサンベツ里山計画も18年の歳月を経て、活動のフィールドとしての基盤が出来上がってきた。この里山づくりで進めていることは、農業が育んできたたくさんの生きものたちの復元にある。人が生きていくために必要な食べ物を生み出している農業が、共に生きてきた生きものたちの命と引き換えに発展してきた近代農業のあり方は何であったのか。この答えの一つでも解決できる道筋を明らかにしていきたい。農作物の流通、農薬やクリーン農業、環境、国際化、農村地域の崩壊、生産者の高齢化など農業が抱える課題は多い。失いつつある生産者の希望や誇りを少しでも応援できたらと願いながら、里山計画の活動の中心的柱に伝統的な農の技術の伝承を据えている。

写真5 子供たちによる田植え体験



里山の文化を育て、後世に伝えること。ハサンベツ里山には今年も野外学習で大勢の子どもたちが訪れている。多くの子どもたちがハサンベツで自然とふれあい、田んぼ作業や生きもの観察会など、貴重な体験をしている(写真5)。

活動は来年、再来年、そして未来へと続いていく。人と自然と農業が共生できる環境づくりは、四半世紀を超える町民活動の物語として今後も語り継がれていく。

※第51回全国ホテル研究会稚内・豊富大会研究発表レポート 2018年7月21日

研究協議(パネルディスカッション)について

◆はじめに◆

北海道稚内市及び豊富町の開催にあたり、議論、課題になったことは、この地に全国の皆さんにお見せするホタルがいるのかという基本的なものでした。豊富町の自然公園にはホタルが生息しており、ホタル観賞会も実施してきました。ただ、「昔はたくさん見られたが、最近はめっきり少なくなった。」という声も聞かれます。

全国ホタル研究会の目的が「……水辺環境の保全、水環境の浄化等を通じ、自然保護活動に寄与することを目的にする。」ということに視点をあて、私たちの住む自然環境について考えることを大切にすることを研究会の開催にあたって重視しました。

◆研究協議のねらい◆

開催地の主たる稚内市は、平成23年(2011年)3月1日に『環境都市宣言』をして、～人と地球にやさしいまちを目指して～、います。したがって、稚内市の研究発表は、子どもたちの自然保護活動の報告になっています。

豊富町も研究発表は、子どもたちのホタルの飼育活動についてですが、ホタル観賞会では、現在の環境をそのまま見ていただくことを大切にしています。

研究会では、二つの街の思い(研究発表)と実態を見ていただいて、参加者の率直な感想やアドバイスをいただきたいと考えています。

◆研究協議について◆

このようなねらいから、パネルディスカッションということになっていますが、参加者(フロアの方々)との意見交換を大事にしたいと考えています。

パネラーは次の方を予定しています。

○パネラー(北海道の研究発表者)

- ・塩 立志(豊富中学校教諭)
- ・渡部 恒久(クサンル緑の少年団指導者 稚内南小学校教諭)
- ・川原 修子(富磯小学校校長)
- ・高橋 慎(栗山町ハサンベツ里山計画実行委員会 実行委員長)
- ・大場 信好(全国ホタル研究会名誉会長)

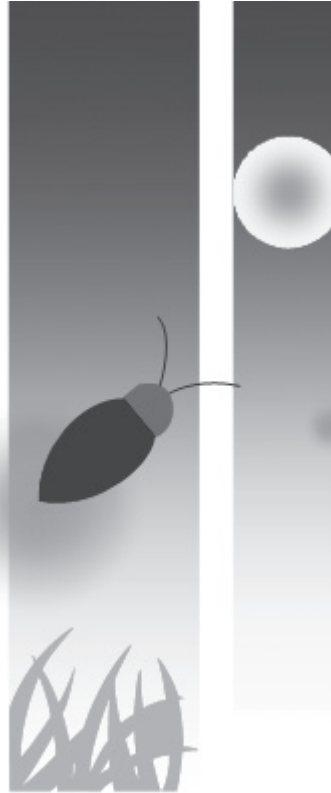
○コーディネーター

- ・曾我部藤夫(研究会実行委員会事務局)

限られた時間ですが、ご理解とご協力をお願いします。

全国ホテル研究会 — 研究大会開催地及び会長等の推移 —

大会回数	開催年月	開催地	会場	事務局長	事務局	編集長	備考
1	1968.8	滋賀県守山市	南 喜市郎	西尾 秋雄	徳島県	西尾 秋雄	発会式
2	1969.8	山口県豊田市	南 喜市郎	西尾 秋雄	徳島県	西尾 秋雄	
3	1970.8	岐阜県関市	南 喜市郎	西尾 秋雄	徳島県	西尾 秋雄	
4	1971.8	東京都日野市	岡 忠夫	西尾 秋雄	徳島県	西尾 秋雄	
5	1972.8	愛知県岡崎市	岡 忠夫	西尾 秋雄	徳島県	西尾 秋雄	研究大会5周年(過去の発表内容の要約)
6	1973.8	福岡県柳川市	岡 忠夫	西尾 秋雄	徳島県	西尾 秋雄	ほたる幼虫放流増殖事業開始
7	1974.8	宮城県仙台市	岡 忠夫	西尾 秋雄	徳島県	西尾 秋雄	
8	1975.8	岐阜県岐阜市	岡 忠夫	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	
9	1976.8	千葉県茂原市	岡 忠夫	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	
10	1977.8	徳島県三好市町	岡 忠夫	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	創立10年記念大会
11	1978.7	山形県米沢市	岡 忠夫	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	
12	1979.7	鳥取県鳥取市	岡 忠夫	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	情報交換誌の発刊
13	1980.6	神奈川県箱根町	岡 忠夫	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	
14	1981.6	熊本県阿蘇町	岡 忠夫	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	研究大会誌:総説カワニナの生活様
15	1982.6	愛知県岡崎市	岡 忠夫	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	創立15年記念大会
16	1983.7	東京都東村山市	富岡 秀(代理)	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	
17	1984.7	滋賀県山東町	富岡 秀(代理)	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	ほたる幼虫放流増殖事業廃止
18	1985.6	神奈川県横浜市	富岡 秀(代理)	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	
19	1986.5	福岡県福岡市	羽根田弥太	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	
20	1987.6	広島県広島市	羽根田弥太	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	創立20年記念大会
21	1988.7	青森県青森市	羽根田弥太	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	団体会員枠の創設
22	1989.5	熊本県熊本市	羽根田弥太	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	
23	1990.5	石川県金沢市	羽根田弥太	村上 美佐男	鳥取県	村上 美佐男	
24	1991.6	神奈川県箱根町	村上 美佐男	圓谷 哲男	神奈川県	圓谷 哲男	研究大会誌:ホテル類の遺伝情報の研究 発表初掲載、研究会投稿規定
25	1992.5	長崎県長崎市	村上 美佐男	圓谷 哲男	神奈川県	圓谷 哲男	
26	1993.6	静岡県沼津市	村上 美佐男	圓谷 哲男	神奈川県	圓谷 哲男	
27	1994.7	新潟県長岡市	村上 美佐男	圓谷 哲男	神奈川県	圓谷 哲男	
28	1995.6	愛知県小牧市	大場 信義	大友 佐登志	神奈川県	後藤 好正	
29	1996.6	広島県福山市	大場 信義	大友 佐登志	神奈川県	後藤 好正	
30	1997.6	北海道恵庭市	大場 信義	大友 佐登志	神奈川県	後藤 好正	大会30年記念誌:総目次、日本産ホテル 目録、天然記念物指定及び蛍保護条例 制定地一覧
31	1998.6	福岡県北九州市	大場 信義	圓谷 哲男	神奈川県	後藤 好正	
32	1999.6	群馬県月夜野町	大場 信義	圓谷 哲男	神奈川県	後藤 好正	
33	2000.5	滋賀県守山市	大場 信義	圓谷 哲男	神奈川県	後藤 好正	
34	2001.7	山形県米沢市	大場 信義	圓谷 哲男	神奈川県	後藤 好正	
35	2002.6	徳島県美郷村	大場 信義	圓谷 哲男	神奈川県	後藤 好正	
36	2003.4	沖縄県久米島町	大場 信義	圓谷 哲男	神奈川県	後藤 好正	
37	2004.6	富山県高岡市	古田 忠久	佐久間 桂祥	愛知県	後藤 好正	
38	2005.6	愛知県西尾市	古田 忠久	佐久間 桂祥	愛知県	後藤 好正	
39	2006.6	山口県下関市	古田 忠久	佐久間 桂祥	愛知県	後藤 好正	
40	2007.6	鳥取県鳥取市	古田 忠久	佐久間 桂祥	愛知県	後藤 好正	ホテル類等生物集団の新規移植及び環境 改変に関する指針の公開
41	2008.6	長崎県長崎市	古田 忠久	佐久間 桂祥	愛知県	後藤 好正	
42	2009.7	青森県青森市	古田 忠久	佐久間 桂祥	愛知県	後藤 好正	学生会員枠の創設
43	2010.7	長野県山ノ内町	中村 光男	中山 歳喜	福岡県	後藤 好正	
44	2011.6	岡山県鏡野市	中村 光男	中山 歳喜	福岡県	後藤 好正	
45	2012.5	鹿児島県霧島市	中村 光男	中山 歳喜	福岡県	後藤 好正	
46	2013.6	福岡県北九州市	中村 光男	中山 歳喜	福岡県	後藤 好正	
47	2014.6	福井県勝山市	中村 光男	中山 歳喜	福岡県	後藤 好正	
48	2015.6	静岡県川根本町	中村 光男	中山 歳喜	福岡県	後藤 好正	
49	2016.7	鳥取県米子市	遊磨 正秀	中山 歳喜	福岡県	高見 明宏	
50	2017.7	新潟県関川村	遊磨 正秀	中山 歳喜	福岡県	高見 明宏	全国ホテル研究会50年の歩み
51	2018.7	北海道稚内市	遊磨 正秀	中山 歳喜	福岡県	高見 明宏	



◆ 発 行 ◆

第51回全国ホテル研究会北海道稚内・豊富大会実行委員会
事務局:〒097-0022 北海道稚内市中央3丁目8番26号